特 71
752

親鸞聖人の法語

270
99

301335-001-6
・
特71-752

親鸞聖人の法語

安部總丸／編

M45. 4
ABF-0001

71
752

親鸞聖人の法語

270
99

特ヲ1
752

親鸞聖人の法語

安部總丸編

5.4.26

一。如今兵部をして捧愚書候。予此年月台星の峰に在て、舍那圓頓の菓を拾ひ、三密止觀の水を汲めども、頑魯にて未だ迷惑出離の曉を知らず、常に生死の顚倒を恐れ、福林國淸及び修禪の寶殿に丹誠をぬきんで、神の冥慮を仰ぎ、終に山王權現の神託を受けて、今夜此觀音の寶前に通夜せしめ、重て菩薩の命告を蒙り、直に日頃の積願を滿足せしむ。仍て今日寶憧の塲を謙下し、遁世の樞にかくれ畢ぬ、今生の拜謁これを限りに候謹言。建仁元年二月十日、僧都

範宴、寶憧院學侶中　（宗祖聖人御歳九歳の時より二十年間。叡山にて後生の一大事の爲に研學修道したまひしも其功なかりし爲め六角堂觀世音菩薩の告命により、吉水法然聖人のお弟子となりたまふとき。叡山學侶中べつかわしたまひし離山狀であります。）

一。予難行道を閣て易行道に移り。聖道門を遁れて淨土門に入りしより以來。芳命を蒙むるにあらずよりんば。豈出離解脱の良因を蓄へんや。喜びの中の喜び何事か之に如かん。然るに同室の好みを結んで。共に一師の誨を仰ぐ輩。これ多しと雖ども。眞實に報土得生の信心を成じたらん事。自他同じく知り難し。かるがゆへに且つは當來の親友たる程をも知り。且つは浮生の思出ともし侍らんが爲めに。御弟子參集の砌にして出言つかうまつりて。面々の意趣をも試みんと思ふ所望ありと云云。（三百八十餘人の弟子方。同じ法然上人の教を受け乍ら。領解まち〳〵にては同じ淨土へ往生しがたければとの。宗祖聖人の御親切より。御弟子朋輩の領解を正したまひし信行両座であります。これやがて滅後の私共の胸の領解をお調べ下さるのであります）

一。なぜかひとしと申さいるべきや。其故は深智博覽にひとしからんとも申さばこそ。まことにおほけなくもあらめ。往生の信心にいたりては。一たび他力信心のことはりをうけたまはりしより以來全く私なし。然れば聖人の御信心も他力よりたまはらせたまふ。善信

が信心も他力なり。かるがゆへにひとしくしてかはる所なしと申す也。（淨土往生の因たる信心は他力廻向のゆへに。智愚善惡の別なく唯同一なりとの御示しであります。）

一。大師聖人（法然）若し流刑に處せられたまはずば、我また配所に趣むかんや。若し我れ配所に趣かずんば。何によりてか邊鄙の群類を化せん。是れなほ師教の恩致なり。（南都北嶺の迫害にあふて師上人と共に流罪の宣告を受け。越後の邊鄙に困難したまひつゝ。群類に道を傳ふることを喜び。御師法然の恩惠であると喜びたまふ御精神）唯々感涙に咽ぶ外はありません。）

一。一向專修といふは、念佛往生の願を一向に信じて二心なきを申すなり。

一。眞實の信心といふは。願力の不思議なるをきゝて疑なき心をいふなり。譬へば火は物を燒き水は物をぬらすと思ふが如く疑なきをもうすなり。

一。われら如きの底下の凡愚は我身の善惡をいはずたゞ南無阿彌陀佛と唱ふれば。誓願の不思議によりてたすかることゝ深く信じて念佛すればかの佛の願に乘じて往生すべきなり。（以上は聖人の弟子蓮位房。聖人の言行を錄せられし。「眞宗龜鑑」に出でゝある聖人の御法語であります。）

一。常陸國新堤の信樂房。聖人（親鸞）の御前にて。法文の義理ゆへ

におほせをもちゐまうさいるによりて。突鼻にあづかりて本國に下向のきざみ。御弟子蓮位房まふされていはく。信樂房の御門弟の儀をはなれて下國のうへは。預けわたさるゝところの本尊聖教をめしかへさるべくや候らん。なかんづくに釋親鸞と外題の下にあそばされたる聖教おほし。御門下を離れ奉る上は定めて仰崇の儀なからんかと云云。聖人の仰に曰く。本尊聖教をとりかへす事甚だ然るべからざる事なり。其故は親鸞は弟子一人もたず。何事を教へて弟子といふべきぞや。皆如來の御弟子なれば皆共に同行なり。念佛往生の信心を得る事は。釋迦彌陀二尊の御方便として發起すと見へたれば。全く親鸞が授けたるにあらず。當世たがひに違逆のとき本尊聖教をとりかへし。つくる所の房號をとりかへし。信心を取りかへすなんどいふこと國中に繁昌と云云。かへず〳〵然るべからず。本尊聖教は衆生利益の方便なれば。親鸞がむつびをすて他の門室に入るといふとも私に自專すべからず。如來の教法は總じて流通物なればなり。然るに親鸞が名字の乘りたるを。法師にくければ袈裟さへの風情にいとひ思ふによりて。たとひかの聖教を山野にすつといふとも。其所の有情群類。かの聖教に救はれて悉く其益をうべし。然らば衆生利益の本懷其時滿足すべし。凡夫の執ずるところの財寶の如くに。とりかへすと言ふ儀あるべからざるなりよく〳〵心得べし。

（嗚呼聖人の思召何とも申しようはありません。）

一。西明寺の禪門父泰時。一切經を書寫せられき。ことの緣ありて聖人その請に應じまし〳〵て一切經御校合ありき。あるとき盃酌のみぎりにして種々の珍物をとゝのへて諸大名面々數獻の沙汰にをよぶ。聖人別して勇猛精進の僧の威儀を正くしまします事なければたゞ世俗の入道俗人等にをなじき御振舞なり。よて魚鳥の肉味等をもきこしめさるゝこと御憚りなし。ときに鱠を御前に進ず。是をきこしめさるゝこと常の如し。袈裟を御着用あり乍らまいる。ときに西明寺の禪門開壽丸とて九歳。さしよりて聖人の御耳に密談せられて曰く。かの入道共面々魚食の時は袈裟をぬぎてこれを食す。善信御房如何なれば袈裟を御着用あり乍ら食しましますぞやと。聖人仰

せられて曰く。あの入道達は常に是を用ゐるについて。これを食するときは袈裟をぬぐべきことゝ覺悟のあいだ。ぬぎて之を食するが善信はかくの如きの食物たまさかなれば。をろげていそぎたべんとするにつきて忘却してこれをぬがずと。又或時先の如くに袈裟を御着用あり乍ら御魚食あります。開壽丸さきの如くに尋ね申さる。聖人また御忘却と答へまします。その時開壽丸さのみ御癈忘あるべからず。是乍併幼少の愚意深意をわきまへ知るべからざるによりて御所存を述べられざるものなり。まげて實義を述成あるべしと。再三のぞみ申されけり。其時聖人のがれがたくして幼童に對して示しまし〳〵て曰く。希に人身を受けて。生命を亡ぼし。肉味を貪ば

ること甚だ然るべからず。されば如來の御制戒にも此事殊にさかんなり。然れども末法濁世の今時の衆生。無戒のときなればたもつものもなく破するものもなし。これによりて剃髪染衣の其すがた。唯世俗の群類に心同じきが故にこれを食す。とても食する程ならば。かの生類をして解脱生死せしむるやうにこそありたく候べし。然るに我れ名字を釋氏にかるとも雖ども。こゝろ俗塵にそみて。智もなく德もなし。なにゝよりてかかの有情を救ふべきや。それによりて袈裟はこれ三世の諸佛解脱憧相の靈服なり。これを着用しながらかれを食せば。袈裟の德用をもて濟生利物の願念をやはたすと存じて。これを着し乍らかれを食するものなり。冥衆の照覽をあふぎて人倫の所見を憚らざること。かつは無慚無愧の甚しきに似たり。然れども所存かくの如しと云云。

（宗祖聖人肉食の思召はかようであります。私共も其こゝろすべきことであります。）

一。御弟子高田の覺信房。重病をうけて臨終にのぞむとき。親鸞聖人入御ありて。危急の體を御覽せらるゝところに。呼吸の息あらくしてすでにたへなんとするに稱名をこたらずひまなし。其時聖人尋ね仰せられてのたまわく。そのくるしげさに念佛强盛の條まづ神妙たり。たゞし所存不審いかんと。覺信房答へ申されて曰く。喜びすでに近けり存せんこと一瞬にせまる。刹那のあいだたりと言ふとも息のかよはんほどは。往生の大益を得たる佛恩を報謝せずんばある

べからずと存ずるについて。かくの如く報謝の爲に稱名つかまつるものなりと。このとき聖人年來常隨給仕のあいだの提撕。そのしるしありけりと。御感のあまり隨喜の御落涙千行萬行なり。

（聖人御一流の稱名は。佛恩報謝の稱名なること明かであます。）

一。難思の弘誓は難度海を度するの大船。無碍の光明は無明の闇を破はするの慧日なり。（御本書）

一。噫弘誓の强緣は多生にも値ひ難く。眞實の淨信は億劫にも獲難し。適た行信を獲ば遠く宿緣を慶ぶべし。（同上）

一。稱名は能く衆生一切の無明を破し。能く衆生一切の志願を滿てたまふ。稱名は卽ち是れ最勝眞妙の正業なり。正業は卽ち是れ念

佛なり。念佛は卽ち是れ南無阿彌陀佛なり。南無阿彌陀佛は卽ち是れ正念なり。（同上）

一。大小の聖人重輕の惡人。皆同く齊しく選擇の大寶海に歸して念佛して成佛すべし。（同上）

一。能く一念喜愛の心を發すれば。煩惱を斷ぜずして涅槃を得るなり。凡聖逆謗齊しく廻入すれば。衆水の海に入りて一味なるが如し。攝取の心光は常に照護したまう。已に能く無明の闇を破すと雖ども。貪愛瞋憎の雲霧。常に眞實信心の天に覆へり。譬へば日光の雲霧に覆はるれども。雲霧の下明かにして闇無きが如し。（同上）

一。生死輪轉の家に還來することは。決するに疑をもつて所止と爲

し。速に寂靜無爲の樂に入ることは。必ず信心を以て能入と爲す。（同上）

一。信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起す。眞心を開闡することは大聖矜哀の善巧より顯彰せり。（同上）

一。大信心は則ち是れ長生不死の神方。忻淨厭穢の妙術。選擇廻向の直心。利他深廣の信樂。金剛不壞の眞心。易往無人の淨信。心光攝護の一心。希有最勝の大信。世間難信の捷徑。證大涅槃の眞因。極速圓融の白道。眞如一實の信海なり。（同上）

一。往相の一心を發起するがゆへに。生として當に受くべき生なし趣としてまた到るべき趣なし。已に六趣四生の因亡じ果滅す。故に頓に三有の生死を斷絶す。（同上）

一。彌勒大士は等覺の金剛心を窮むるが故に。龍華三會の曉には無上の覺位を極むべし。念佛の衆生は橫超の金剛心を窮むるが故に。臨終一念の夕べに大般涅槃を超證す。（同上）

一。難化の三機難治の三病は。大悲の弘誓をたのみ利他の信海に歸すれば。斯を矜哀して治し斯を憐憫して療したまへり。喩へば醍醐の妙藥の一切の病を療するが如し。濁世の庶類穢惡の群生。應に金剛不壞の眞心を求念すべし。本願醍醐の妙藥を執持すべし。（同上）

一。大小の聖人一切の善人。本願の嘉號を以て。已が善根とするが故に信を生ずること能はず。佛智を了らず。彼の因を建立せるを了

知すること能はず。故に淨土に入ることなきなり。（同上）

一。聖道の諸教は在世正法の爲にして。全く像末法滅の時にあらず已に時を失し機に乖けるなり。淨土眞宗は在世正法像末法滅濁惡の群萌齊しく悲引したまふなり。（同上）

一。慶ばしき哉や。心を弘誓の佛地に樹て。念を難思の法海に流す深く如來の矜哀を知りて。良とに師教の恩厚を仰ぐ。慶喜彌よ至り至孝彌よ重し。茲に因て眞宗の詮を鈔し。淨土の要を摭ろふ。唯佛恩の深きことを念ひ人倫の嘲を耻ぢず。若し斯書を見聞せんもの。信順を因と爲し疑謗を緣となして。信樂を願力に彰はし妙果を安養に顯はさむ。（同上）

一。定散自力の行人は。不可思議の佛智を疑惑して信受せず。如來の尊號を己が善根として。自ら淨土に廻向して果遂のちかひをたのむ。不可思議の名號を稱念しながら。不可稱不可說不可思議の大慈の誓願を疑ふ。其罪ふかく重くして。七寶の牢獄にいましめられて命五百歲のあいだ自在なること能はず。三寶を見奉つらず。つかへ奉つる事なしと如來はときたまへり。（三經往生文類）

一。凡夫といふは。無明煩惱我等が身にみちゝて。欲も多く。怒り腹立ち。そねみ。妬むこゝろ。多く。ひまなくして臨終の一念に至るまで。とゝまらず。きえず。たえずと。水火二河のたとへにあらはれたり。かゝる淺間敷我等。願力の白道を一分二分やうゝづ

丶歩み行けば。無碍光佛のひかりの御心に。攝め取りたまうが故にかならず安樂淨土へいたれば。彌陀如來と同く。かの正覺のはなに化生して大般涅槃のさとりを開かしむ。（一念多念證文）

一。憶念といふは。信心まことなる人は。本願を常に思ひ出づるこゝろのたゆずつねなるなり。（唯信鈔文意）

一。自力のこゝろをすつといふは。やう〳〵さま〴〵大小の聖人善惡の凡夫の。みづからが身をよしと思ふこゝろをすて。身をたのまず。惡きこゝろをさかしらかへりみず。又人をよしあしと思ふこゝろをすてゝ。ひとすぢに具縛の凡夫屠沽の下類。無导光佛の不可思議の誓願廣大智惠の名號を信樂すれば。煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。（同上）

一。過去久遠に。三恒河沙の諸佛の世に出でたまひしみもとにして自力の大菩提心を起しき。恒沙の善根を修せしにより。いま大願業力にあふことを得たり。他力の三信心を得たらん人は。ゆめ〳〵餘の善をそしり餘の佛聖をいやしうすること勿れ。（同上）

一。いまこの世を。如來のみのりに末法惡世とさだめたまへるは。一切有情まことのこゝろなくして。師長を輕慢し。父母に孝せず。朋友に信なくして。惡をのみ好むゆへに。世間出世みな心口各異言念無實なりとおしへたまへり。（同上）

一。自力とまふすことは。行者のをの〳〵の緣に從ひて。餘の佛號

を稱念し餘の善根を修行して。我身をたのみ我がはからひのこゝろを以て。身口意のみだれごゝろをつくろひ。めでたうしなして淨土へ往生せんと思ふを自力と申すなり。他力と申すことは。彌陀如來の御誓ひの中に。選擇攝取したまへる。第十八の念佛往生の本願を信樂するを他力とまふすなり。(歎燈鈔)

一我身のわるければ。いかでか如來むかへたまはんと思ふべからず凡夫はもとより煩惱具足したるが故に。わるきものと思ふべし。また我こゝろよければ往生すべしと思ふべからず。自力の御はからひにては眞實の報土へむまるべからざるなり。(同上)

一。自然といふは。もとよりしからしむといふ言葉なり。彌陀佛の

御ちかひもとより行者のはからいにあらずして。南無阿彌陀佛とたのませたまひて。むかへんとはからはせたまひたるによりて。行者のよからんとも。あしからんともおもはぬを。自然とは申すぞとき〻て候。(同上)

一。なによりも。こぞ。ことし。老少男女多くの人々死にあいて候らんことこそあはれに候へ。たゞし生死無常のことはり。くはしく如來のときをかせおはしまして候へば。おどろきおぼしめすべからず候なり。まづ善信が身には臨終の善惡をはまふさず。信心決定の人は疑なければ正定聚に住することにて候なり。(同上)

一。往生は何事も〳〵凡夫のはからひならず。如來の御誓にまかせ

まいらせたればこそ他力にては候へ。様々にはからいあふて候らんおかしく候。（同上）

一。たゞ不思議と信じつるうへは。とかく御はからひあるべからず候。往生の業には私のはからひあるまじく候なり。穴賢々々。たゞ如來にまかせまいらせおはしますべく候。（同上）

一。尋ね仰せられ候て攝取不捨のこと。般舟三昧行道往生讃ど申すに仰せられ候を見まゐらせ候へば。釋迦如來彌陀佛われらが慈悲の父母にて。さまゞの方便にて。われらが無上の信心をば開き起させたまふと候へば。誠の信心の定まることは。釋迦諸佛の御はからひと見へて候へば。往生の心に疑なくなり候は。攝取せられまゐらせたる故と見へて候。攝取の上はともかくも行者のはからひあるべからず候。（同上）

一。御文度々まゐらせ候き。御覽せずや候ひけん。何事よりも明法の御房（辨圓）の往生の本意遂ておはしまし候こそ。常陸國うちのこれに志おはしまします人々の爲に。目出度事にて候へ。往生はともかくも凡夫のはからひにてすべき事にても候はず。めでたき智者もはからうべき事にも候はず。大小の聖人だにも。ともかくもはからはで。たゞ願力にまかせてこそおはします事にて候へ。ましてをの〳〵のやうにおはします人々は。唯此誓ありときゝ。南無阿彌陀佛にあひまいらせたればこそ。難有候。御果報にては候なれ。とかく

はからはせたまふことゆめ〳〵候べからず。（同上）

一。彌陀の本願と申すは。名號を稱へんものを極樂へむかへんと。誓はせたまひたるを。深く信じて稱ふるがめでたきことにて候なり信心ありとも名號を稱へざらんは詮なく候。また一向名號を稱ふとも信心あさくば往生し難く候。されば念佛往生とふかく信じて名號をとなへんずるは〻疑なき報土の往生にてあるべく候なり。（同上）

一。めでたき佛の御誓ひのあればとて。わざとすまじきことをも爲し。思ふまじきことをも思ひなんどせんは。よく〳〵此世のいとはしからず。身の惡きことをも思ひ知らぬにて候へば。念佛に志もなく佛の御誓ひにも志のおはしまさぬにて候へば。念佛せさせたまふとも。その御こゝろざしにては順次の往生もかたくや候べからん。（同上）

一。釋迦彌陀の御方便にもよほされて。いま彌陀の誓ひをきゝ始めておはします身にて候なり。もとは無明の酒に醉ひて。貪欲瞋恚愚痴の三毒をのみ。このみめしあふて候つるに。佛の誓を聞き始めしより無明の醉も少しづゝさめ。三毒をも少しづゝこのまずして。阿彌陀佛の藥をつねにこのみめす身となりておはしましあふて候ぞかし。然るに猶醉もさめやらぬにかさねて醉をすゝめ。毒もきわやらぬに猶毒をすゝめられ候らんこそあさましく候へ。煩惱具足の身なればとて。こゝろにまかせて。身にもすまじきことをもゆるし。口

にもいふまじきことをもゆるし。心にも思ふまじきことをもゆるして。いかにもこゝろのまゝにてあるべしと申しあふて候らんこそ。返々不便におぼへ候へ。醉もさめぬさきに猶酒をすゝめ。毒もきねやらぬにいよ〳〵毒をすゝめんが如し。藥あり毒を好めと候らんことはあるべくも候はずとこそおぼえ候。佛の御名をもきゝ念佛を申して。久くなりておはしまさん人々は。此世のあしき。この身のあしきことをば。いとひすてんとおぼしめすしるしも候べしとこそおぼえ候へ。（同上）

一。深く誓ひをも信じ。阿彌陀佛をもこのみもうしなんとする人はこゝろのまゝにて惡事をも振舞なんどせじとおぼしめし。あはせたまはゞこそ。世を厭ふしるしにても候はめ。又往生の信心は釋迦彌陀の御すゝめによりて。おこるとこそみへて候へは。さりともまことのこゝろおこらせたまひなんには。いかでか昔の御こゝろのまゝにては候べき。（同上）

一。念佛申さん人々は。我が御身の料はおぼしめさずとも。朝家の御爲國民のために。念佛まうしあはせたまひ候はゞ。めでたく候べし。（御消息集）

一。往生一定とおぼしめさん人は。佛の御恩をおぼしめさんに。御報恩の爲に御念佛こゝろに入れて申して。世の中安穩なれ佛法ひろまれと。おぼしめすべしとぞおぼへ候。（同上）

一。世々生々に無量無邊の諸佛菩薩の利益によりて。よろづの善を修行せしかども。自力にては生死を出でずありしゆへ。曠劫多生のあいだ。諸佛菩薩の御すゝめによりて。今もうあひがたき彌陀の御誓にあひまいらせ候御恩を知らずして。萬の佛菩薩をあだにもうさんは深き御恩を知らず候べし。佛法を深く信ずる人をは天地におはします。萬の神は。影の形にそへるが如くして守らせたまふ事にて候へば。念佛を信じたる身にて。天地の神をすてもうさんと思ふ事ゆめ〳〵なき事なり。神祇等だにもすてられたまはず。如何に況んや。萬の佛菩薩をあだにもふし愚かに思ひまいらせ候べしや。(同上)

(以上は宗祖聖人。御歸洛の後關東の同行へ差遣はしたまひし。御消息の語であります。其醇々として慈母の子を誨ゆるが如きの。御法語難有頂戴致したき事であります。)

一。彌陀の誓願不思議に助けられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて。念佛申さんとおもひ立つてこゝろのおこるとき。すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまうなり。然れば本願を信ぜんには他の善も要にあらず。念佛にまさるべき善なきゆへに。惡をもおそるべからず。彌陀の本願をさまたぐる程の惡なきがゆへに。(歎異抄)

一。親鸞にをきては。唯念佛して。彌陀に助けられまいらすべしと。よき人の仰を蒙りて信ずる外に別の子細なきなり。念佛はまことに淨土に生るゝ因にてやはんべるらん。また地獄におつべき業にてや

はんべるらん。總じてもて存知せざるなり。たとひ法然聖人に。すかされまいらせて。念佛して地獄におちたりとも。更に後悔すべからず候。其故は自餘の行をもはげみて。佛になるべかりける身が。念佛をもうして地獄に落ちて候はゞこそ。すかされたてまつりてといふ後悔も候はめ。何れの行も及びがたき身なれば。とても地獄は一定すみかぞかし。彌陀の本願まことにおはしまさば。釋尊の說敎虛言なるべからず。佛說まことにおはしまさば。善導の御釋虛言したまふべからず。善導の御釋まことならば。法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば。親鸞がもうすむねまた以てむなしかるべからず候歟。詮するところ愚身が信心にをきては如斯。こ

のうへは念佛をとりて信じたてまつらんとも。またすてんとも面々の御はからいなり。（同上）

一。念佛者は無碍の一道なり。そのゆかはれいかんとならば。信心の行者には。天神地祇も敬伏し。魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報も感ずることあたはず。諸善も及びがたきが故に無碍の一道なり。（同上）

一。念佛申し候へども踊躍歡喜のこゝろをろそかに候こと。またいそぎ淨土へまいりたきこゝろの候はぬは。いかにと候べき事にて候やらんと申し入れて候ひしかば。親鸞もこの不審ありつるに。唯圓房おなじこゝろにてありけり。よく〳〵案じ見れば。天に踊り地に

躍るほどに喜ぶべき事を。喜ばぬにていよ〳〵往生は一定とおもひたまふべきなり。喜ぶべきこゝろをおさへて喜ばせざるは煩惱の所爲なり。然るに佛かねてしろしめして。煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば。他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと知られて。いよ〳〵たのもしくおぼゆるなり。また淨土へいそぎ參り度こゝろのなくて。いさゝか所勞のこともあれば。死なんずるやらんと。心細くおぼゆることも煩惱の所爲なり。久遠劫よりいまま で流轉せる苦惱の舊里はすてがたく。未だ生れざる安養の淨土はこひしからず候ふこと。まことによ〳〵煩惱の興盛に候にこそ。名殘惜く思へども。娑婆の緣つきて。力なくしてをはるとき彼の淨土へは參るべきなり。急ぎ參りたきこゝろのなきものを。殊に憐みたまふなり。これにつけてこそ。いよ〳〵大悲大願はたのもしく往生は決定と存知し候へ。（同上）

一。誓願の不思議によりて。たもちやすき稱へやすき名號を案じ出したまひ。此名字を稱へんものを迎へとらんと御約束あることなれば。まづ彌陀の大悲大願の不思議に助られまいらせて。生死を出べしと信じて。念佛のまうさるゝも如來の御はからひなりとおもへばすこしもみづからのはからひ雜はらざるがゆへに本願に相應して。眞實報土に往生するなり。（同上）

一。彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば。ひとへに親鸞一人が

ためなりけり。さればそこばくの業を持ちける身にてありけるを。たすけんとおぼしめしたちたる本願のかたじけなさよ。（同上）

一。煩惱具足の凡夫。火宅無常の世界は。よろづのこと。みなもてそらごと。たはごと。まことあることなきに。たゞ念佛のみぞまことにておはします。（同上）

一。日輪まさに須彌の半腹を行度するとき。他州のひかり近づくについて。この南州あきらかになれば。日出でゝ夜はあくるといふなり。これたとへなり。無碍光の日輪照觸せざるときは。永々昏闇の無明の夜あけず。しかるにいま宿善時到りて。不斷難思の日輪貪瞋の半腹に行度するとき。無明やうやくやみはれて信心忽ちに明かなり。（口傳抄）

一。宿善あつき人は今生に善を好み惡ををそる。宿善重きものは今生に惡を好み善にうとし。たゞ善惡のふたつをば過去の因にまかせ往生の大益をば如來の他力にまかせて。かつて機のよきあしきに目をかけて往生の得否を定むべからず。（同上）

一。愛別離苦にあふて父母妻子の別離を悲むとき。佛法を保ち念佛する機。いひ甲斐なくなげきかなしむこと然るべからずとて。彼をはじしめ諫むること。多分先達めきたる輩皆かくの如し。この條聖道の諸宗を行學する機のおもひならはしにて。淨土眞宗の機教を知らざるものなり。凡夫は事に於て拙なく愚かなり。たとひ未來の

生處を彌陀の報土と思ひ定め。共に淨土の再會を疑ひなしと期すとも。をくれ先立つ一旦の悲み。まどへる凡夫として何ぞ之なからんなかんづく曠劫流轉の世々生々の芳契　今生を以て輪轉の結句とし愛執愛着の假りの宿。此人界の火宅出離の舊里たるべき間だ　依正二報ともに。いかでか名殘惜からざらん。これを思はずんば凡衆の攝にあらざるべし。けなげならんこそ。あやまて自力聖道の機たるか。今の淨土他力の機にあらざるかとも疑ひつべけれ。愚に拙げにして歎き悲まんこと。他力往生の機に相應たるべし。うちまかせて凡夫のありさまにかはり目あるべからず。往生の一大事をば如來に任せ奉り。今生の身の振舞。心のむけよう。口にいふこと。貪瞋痴の三毒を根として。殺生等の十惡。穢身の有ん程は。たちがたく伏し難きによりて。之を離るゝことあるべからざれば。なか〳〵愚に拙げなる煩惱成就の凡夫にて。ありに飾るところなき姿にてはんべらんこそ。淨土眞宗の本願の正機たるべけれ。（同上）

一。是非しらず。邪正もわかぬ此身にて。小慈小悲もなけれども。名利に人師を好むなり。往生淨土の爲にはたゞ信心を先とす。其外をば顧みざるなり。往生程の一大事凡夫のはからふべき事に非ず。ひとすじに如來にまかせたてまつるべし。すべて凡夫に限らず。補處の彌勒菩薩を初めとして。佛智の不思議をはからふべきにあらずまして凡夫の淺智をや。返々如來の御誓に任せたてまつるべきなり

これを他力に歸したる信心發得の行者といふなり。されば我どして淨土へ參るべしとも。又地獄へ行くべしとも定むべからず。故聖人（法然）の仰せに。源空があらん所へ行かんと思はるべしと。たしかに承りし上は。たとひ地獄なりとも故聖人のわたらせたまふところへ參るべしと思ふなり。此度もし善知識に遇ひ奉らずば。我等凡夫必ず地獄に落つべし。いま聖人の御化導にあづかり。彌陀の本願を聞き。攝取不捨のことわりをむねにおさめ。生死の離れ難きを離れ淨土の生れ難きを一定と期すること。さらに私の力にあらず。たとひ彌陀の佛智に歸して念佛するが。地獄の業たるを詐りて。往生淨土の業因ぞと。聖人授けたまふにすかされまいらせて。地獄に墮つ

とも。更に悔む思ひあるべからず。其故は明師に遇ひ奉らでやみなましかば。決定惡道へゆくべかりつる身なるがゆへなり。然るに善知識にすかされ奉りて。惡道へ行かば獨り行くべからず師と共に落つべしされば。唯地獄なりといふとも。故聖人のわたらせたまふ所へまいらんと思ひかためたれば。善惡の生所私の定むる所にあらず。

（執持抄）

一。往生の信心と申す事は。一念も疑ふ事の候はぬをこそ往生一定とは思ひて候へ。光明寺の和尚（善導）の。信の樣を敎へさせたまひ候には。まことの信を定められて後は。彌陀の如くの佛釋迦の如くの佛空にみちゝて。釋迦の敎へ彌陀の本願はひが事なりと仰せ

らるゝとも。一念もうたがひあるべからずとうけたまはり候。

（親鸞聖人血脈文集）

一。安樂淨土にいたるひと。五濁惡世にかへりては。釋迦牟尼佛のごとくにて。利益衆生はきはもなし。若不生者のちかひゆへ。信樂まことにときいたり。一念慶喜するひとは往生かならず定まりぬ。たとひ大千世界に。みてらん火をもすぎゆきて。佛の御名をきくひとは。ながく不退にかなふなり。佛慧功德をほめしめて。十方の有緣にきかしめん。信心すでにゑんひとは。つねに佛恩報すべし。彌陀の大悲ふかければ。佛智の不思議をあらはして。變成男子の願を立て。女人成佛ちがひたり。大聖おの〳〵もろともに。凡愚底下のつみびとを。逆惡もらさぬ誓願に。方便引入せしめけり。十方微塵世界の。念佛の衆生をみそなはし。攝取してすてざれば。阿彌陀となづけたてまつる。大聖易往とときたまふ。淨土をうたがう衆生をば。無眼人とぞなづけたる。無耳人とぞのべたまふ。（和讃）

一。阿彌陀如來來化して。息災延命のためにとて。金光明の壽量品ときおきたまへるみのりなり。山家の傳敎大師は國土人民のあれみて。七難消滅の誦文には。南無阿彌陀佛をとなふべし。南無阿彌陀佛をとなふれば。この世の利益きはもなし。流轉輪廻のつみきへて定業中夭のぞこりぬ。天神地祇はこと〳〵く。善鬼神となづけたりこれらの善神みなともに。念佛のひとをまもるなり。願力不思議の

信心は。大菩提心なりければ。天地にみてる惡鬼神。みなことぐくおそるなり。南無阿彌陀佛をとなふれば。十方無量の諸佛は。百重千重圍繞して。よろこびまもりたまふなり。(同上)

一。超日月光この身には。念佛三昧おしへしむ。十方の如來は衆生を。一子の如く憐念す。子の母をおもうがごとくにて。衆生佛を憶すれば。現前當來どをからず。如來を拜見うたがはず。(同上)

一。生死の苦海ほとりなし。ひさしくしづめるわれらをば。彌陀弘誓のふねのみぞ。のせてかならずわたしける。一切菩薩ののたまはく。我等因地にありしとき。無量劫をへめぐりて。萬善諸行を修せしかど。恩愛はなはだたちがたく。生死はなはだつきがたし。念佛三昧行じてぞ。罪障を滅し度脫せし。(同上)

一。本願力にあひぬれば。むなしくすぐるひとぞなき。功德の寶海みちぐて。煩惱の濁水へだてなし。如來淨華の聖衆は。正覺のはなより化生して。衆生の願樂ことぐく。すみやかにとく滿足す。

信心すなはち一心なり。一心すなはち金剛心。金剛心は菩提心。この心すなはち他力なり。願土にいたれはすみやかに。無上涅槃の證してぞ。すなはち大悲をおこすなり。これを廻向となづけたり。

(同上)

一。無碍光の利益より。威德廣大の信をえて。かならず煩惱のこほりとけ。すなはち菩提のみづとなる。罪障功德の體となる。こほり

とみずのごとくにて。こほりおほきにみずおほし。さわりをほきに徳おほし。安樂佛國にいたるには。無上寶珠の名號と。眞實信心ひとつにて。無別道故とときたまふ。無碍光如來の名號と。かの光明智相とは。無明長夜の闇を破し。衆生の志願をみてたまふ。(同上)

一。濁世の起惡造罪は。暴風駛雨にことならず。諸佛これらをあはれみて。すゝめて淨土に歸せしめり。一形惡をつくれども。專精にこゝろをかけしめて。つねに念佛せしむれば。諸障自然にのぞこりぬ。縱令一生造惡の。衆生引接のためにとて。稱我名字と願じつゝ。若不生者とちかひたり。(同上)

一。彌陀の名願によらざれば。百千萬劫すぐれども。いつゝのさはりはなれねば。女身のいかでか轉すべき。經道滅盡ときいたり。如來出世の本意なる。弘願眞宗にあひぬれば。凡夫念じてさとるなり煩惱具足と信知して。本願力に乘すれば。すなはち穢身すてはて法性常樂證せしむ。五濁惡世のわれらこそ。金剛の信心ばかりにて。ながく生死をすてはてゝ。自然の淨土にいたるなれ。金剛堅固の信心の。さだまるときをまちえてぞ。彌陀の心光攝護して。ながく生死をへだてける。弘誓のちからをかふらずば。いづれのときにか娑婆をいでん。佛恩ふかくおもひつゝ。つねに彌陀を念ずべし。娑婆永劫の苦をすてゝ。淨土無爲を期すること。本師釋迦のちからなり。長時に慈恩を報ずべし。(同上)

一。煩悩にまなこさへられて。攝取の光明みざれども。大悲ものうきことなくて。常にわが身をてらすなり。極悪深重の衆生は。他の方便さらになし。ひとへに彌陀を稱してぞ。淨土にむまるとのべたまふ。（同上）

一。曠劫多生のあいだにも。出離の強縁しらざりき。本師源空いまさずば。このたびむなしくすぎなまし。眞の知識にあふことは。かたきがなかになをかたし。流轉輪廻のきはなきは。疑情のさはりにしくぞなき。（同上）

一。無明煩惱しげくして。塵數のごとく遍滿す。愛憎違順することは。高峯岳山にことならず。有情の邪見熾盛にて。叢林棘刺の如くなり。念佛の信者を疑謗して。破壞瞋毒さかりなり。無明長夜の燈炬なり。智眼くらしとかなしむな。生死大海の船筏なり。罪障おもしとなげかざれ。願力無窮にましませば。罪業深重もおもからず。佛智無邊にましませば。散亂放逸もすてられず。他力の信心うるひとを。うやまいおきによろこべば。すなはちわが親友ぞと。教主世尊はほめたまふ。如來大悲の恩德は。身を粉にしても報ずべし。師主知識の恩德も。ほねをくだきても謝ずべし。（同上）

一。無始よりこのかたこの世まで。聖德皇のあはれみに。多々のごとくにそひたまひ。阿摩の如くにおはします。多生曠劫この世まであはれみかふれるこの身なり。一心歸命たへずして。奉讃ひまなく

このむべし。聖德皇のおあはれみに。護持養育たへずして如來二種の廻向に。すゝめいれしめおはします。（同上）

一。淨土眞宗に歸すれども。眞實の心はありがたし。虛假不實のわが身にて。淸淨の心もさらになし。無慚無愧のこの身にて。まことのこゝろはなけれども。彌陀廻向の御名なれば。功德は十方にみちたまふ。小慈小悲もなき身にて。有情利益はおもふまじ。如來の願船いまさずば。苦海をいかでかわたるべき。（同上）

一。よしあしの文字をもしらぬひとはみな。まことのこゝろなりけるを。善惡の字しりがほは。おほうらごとのかたちなり。是非しらず邪正もわかぬこの身なり。小慈小悲もなけれども。名利に人師を好むなり。（同上）

＊　＊　＊　＊　＊

一。「身命をすてゝ修行をしたれども。見難きものは無爲の佛性」（この歌は。宗祖叡山にて大滿讀誦の行を滿じたまふとき。師の慈鎭和尙に申上げられし歌であります。其時師の和尙は「釋迦はさり彌勒の世にはほど遠し時は末代機は下根なり」と。あそばされました。）

一。「會者定離かねてありとはきゝしかど。昨日今日とは思はざりしを。」（我聖人。流罪の宣告を受け。師法然聖人と東西に分れたまふ折。名殘を惜みて詠みたまひし歌であります。師法然聖人取あ

へず。「別れ行く路は遙かにへだつれと。宿りは同じ華のうてなぞ」と。返歌あそばされました。)

一。「音にきく鋸り坂をひきわかれ。身の行すゑはこゝろ細呂木。」

一。「稱へてもまた稱へても忘れなよ。六字の外につとめなければ」

一。「法の道わたれば遠き倉部川。彌陀は松任ちかわたし船。」

一。「わが法は朝夕なでし稚兒の髪。言ふも結はるゝとくも解るゝ」

(以上四首の歌は。北陸路を配所越後に趣かせらる途中。折に觸れ口ずさみたまひたるものと聞き傳へております。)

一。「柿崎にしぶ〳〵宿をかりけるに。あるじの心熟柿とぞなる。」

(越後國頸城郡柿崎の里。富豪小畠左衞門の軒下に宿を借りたまひしとき。左衞門宿善時到り上人に歸仰して念佛信者となりしかば。聖人九字の尊號を書き與へたまひ。翌朝出發に際し戯れに詠みたまひし歌にて。其時左衞門取あゑず。「かけ通る法師に宿をかしければかきくれたりや九字の名號」と。戯れましたとぞ。)

一。「皆人の死出の山路を行くときは。一重の着物肩にかゝらず」。

「過去よりの十二重を脱ぎすてゝ。裸でまいる彌陀の淨土へ。」

(此二首は關東御滯在の時。聞法篤信の彌七なるもの。貧困にして夫婦の中に一枚の着がへを持たざりしゆへ。或日其婦裸同樣の破れ着物を着て參詣せしに。皆人笑ひければ。其時聖人の詠みたまひし歌であります。)

一。「五刼惟思の苗代に。兆載永刼のしろをして。一念歸命の苗を植へ。念々稱名の水をかけ。雜行雜修の草を取り。往生の秋になりぬれば。このみとるこそうれしけれ。」（宗祖聖人常州稻田にましますとき。在家の人に交りて。共に田植を手傳ひたまひしとき、の田植歌と聞き傳へて居ります。）

一。「病む子をばあづけてかへる旅の空。心はあとに殘りこそすれ」（關東より歸洛の途。箱根山上に御弟子性信と名殘りを惜み。關東の同行を性信に託し。分れたまひし時の口ずさみであります。難有き思召ではありませんか。）

一。我今安養淨土に還歸すと雖ども。和歌の浦曲の片雄波のよせかけよせかけ來らんに同じ。一人居て喜ばゝ二人と思ふべし。二人居て喜ばゝ三人と思ふべし。其一人は親鸞なり。「我れなくも法はつきまじ和歌の浦。あをくさ人のあらんかぎりは」（宗祖聖人御臨末の語であります。）

＊　＊　＊　＊　＊

超世の悲願きゝしより　われらは生死の凡夫かは
有漏の穢身はかはらねど　こゝろは淨土にすみあうぶ
他力の信を得んひとは　佛恩報ぜんためにとて
如來二種の廻向を　十方にひとしくひろむべし
南無阿彌陀佛をとけるには　衆善海水の如くなり

かの清淨の善身にゐたり　ひとしく衆生に廻向せん
南無阿彌陀佛

聖曆明治四十五年四月聖日
祖影の前に燒香跪坐して謹みて鈔す
末弟　自得識

五十四

親鸞聖人の法語

明治四十五年四月十一日印刷
明治四十五年四月十五日發行

定價金八錢

編輯者　安部總丸
發行兼印刷者　京都市下京區中珠數屋町烏丸東入二十人講町二十二番戸　西村七兵衛

不許複製

發行所　京都市東六條　法藏館
（電話下四五八番　口座六坂壹七〇四番）

270
99

河崎顯了先生著

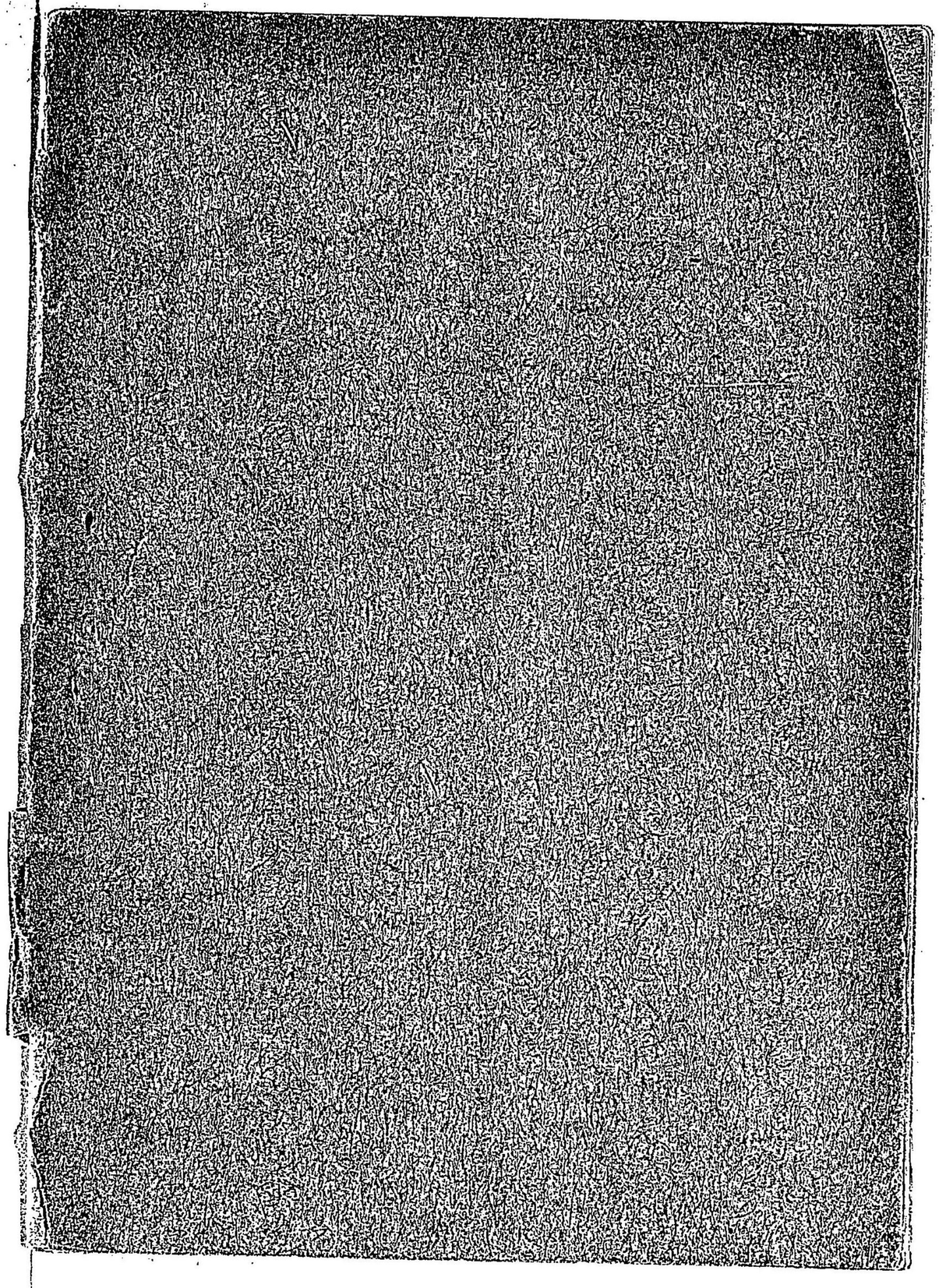
▼家庭說教　定價金參拾錢

▼續家庭說教　定價金參拾錢

▼新釋百喩經　定價金拾八錢

▼新藏經譬喩聖話　定價金參拾五錢

▼新藏經因緣聖話　定價金參拾五錢

▼一日一談　定價金拾五錢

發行所　京都市東六條　法藏
電話下四五八番　大阪口座壹七